
貴く翔べ

風雷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

貴く翔べ

【Nコード】

N5984Z

【作者名】

風雷

【あらすじ】

突然、異世界に放り込まれたらどうしますか？ その世界が耐えられないほどに理不尽だったらどうしますか？ あなたは、それに立ち向かいますか？

第一章「原初の声」(1)

湯山翔ゆまかけるという男がいる。よく間違えられるが、「ゆやま」ではない。

背は高く、瘦せうく軀である。目つきが少し悪いが、笑うと大きな笑窪えくぼができる。鼻筋がしっかりしていて、よくみると美顔であるようにもみえる。ただ、猫背なのと腹から声を出さないせいで、彼を遠くから見た人は、なにやら陰気な印象を受ける。

話してみるとわかることだが、非常におしゃべりで、自分の得意な話題になると何時間でも話し続ける。相手が聞いているかいないかはどうでもよいらしく、それもそのはずで、彼は話しながら自分の考えをまとめる性質たちなのだ。その典型として、他人の話——特に自分が興味を持ってない話題——を聴かない。会話イコール思考であるこの人種は、実に自由詩的な——つまるところ非機能的な——思考回路を持っているのだが、それ自体が言語を超越した自己完結に終始しているために、論理立てての熟考やディベートなどに関しては哀れなほどに無能だ。この手の人間は自分の知らないところで敵をつくるが、どこか憎みきれない一種の愛嬌あいきょうも持ち合わせている。

湯山は本が好きだ。

とはいえ、小難しいものは読まず、やや現実離れした歴史ものなどは彼の嗜好しこうによく合っている。

二十六という年齢は、冒険や幻想を現実を持ち込みたくなるくらいに憧あこがれるには、随分と遅い。故に彼は、精神が子供じみた憧憬しょうけいを脱ぎ捨てることなく年を重ねてしまった者の一例として、書物から故人の生き様を知り、それを楽しむ事で自分の人生の心細さを慰めている。暇な時間に歴史小説などを取り出して、それを読むくらいでしか、湯山は生きる虚しさを忘れる術を知らなかった。

「湯山の血は古いぞ」

と、足が悪いくせに未だに警備員の仕事を続ける父が、酒臭い息

と一緒に吐く言葉が、湯山にとってはやりきれないことがある。

どうやら、湯山家は何代か前には大陸に住んでいて、遡ればどこかの王家に繋がっているらしい。父が言うには、湯山はもとは唐山とうざんであり、これは大陸の洒落しゃれた呼び名である。

「アホくさ……」

湯山家の現状を知れば、彼の嘆きもわかるだろう。何百年も昔の王侯貴族の後裔こういらしいこの家は、どう考えても豊かではなく、当の父は安月給の警備員で朝も夜もなく働いており、派遣社員を勤める湯山自身も、ひとつどころに留まることもできずに、昨日知り合った相手に顎あごで使われる日々をすごしている。

その癖、父から実を伴わない家格ばかり言い含められたせいとか、妙に誇り高い。

分不相応というべきだろう。幼い頃、少しばかり勉強ができたことで、母が期待をかけ過ぎたせいもあるが、とにかく湯山は高校時代に挫折を味わい、大学に進学しても周囲に溶け込めずに、学費を稼ぐという名目でアルバイトに打ち込み、ついには退学してしまった。

それでいて人に使われたくないという戯言たわごとを抜かす男に、何かを報いるという機能を、世間は持っていない。

「もうちょつと高けりゃなあ……」

給与明細を破り捨てながら、つぶやく。湯山はこんな男だった。

世間が自分の能力を生かすように出来ていないのだ——と思うほどには、湯山は世間知らずではない。人の能力とは、その者が革命家か芸術家でもない限りは、人間社会にどう適応するかで優劣が決まる以上、右の言葉は自分の無能を棚に上げて、賢さかしらに叫んでいるに過ぎない。そんな恥ずかしい真似をしでかすほどには、この男は馬鹿ではない。

誇り高いと書いたが、周囲から見るとそうでもない。他人に馬鹿にされても、へらへらと笑っているだけで、およそ湯山の周囲の間はこの男が怒っているところを見たことがない。ただし湯山本人

は自分が短期であることを自覚しており、それが露わになるような状況を常に避けている。

湯山は自分が時々わからない。

——あなたはこうなのよ。

と、やさしく——あるいは厳しく、指し示してくれる恋人や友もない。彼らも多分、湯山のことがよくわからないのだろう。だろうどころか、面と向かって言われることすらある。

「——てめえは自分のことがわかるのかよ？」

そうやって言い返してみるが、はつきりいって湯山にはどうでもよかった。自分のよくわからない箇所、というのは何やら気宇の大きな人みたいで、どこか好いていた。こういう意味では湯山は自分が好きな人間である。

彼にとつての一大事は、よくわからない自分のことではなく、生きていることに退屈を感じ始めた自分がいることだった。

以前はインターネット上で特定の人物がバッシングされているのを見ても、祭気分が無意味に騒ぎ立てる連中に腹を立てたが、最近は彼らに近い視点でものを見るようになった自分に気づいた。

——滅びろ。滅びろ……

自分が下衆な趣向を喜ぶようになったことよりも、人の不幸を楽しむ理由がただの退屈であったことが、はつきり言って湯山には苦痛だった。

「つまらない……」

自分の生き方が、何よりましてつまらない。

退屈は人類の敵である。

と、いいたいくなるのは、湯山が——その小心さからはちよつと考えられないが——面白さ目当てに悪事に手を染めたことだ。

勿論、当の本人は金目当てのつもりだが、少し頭を働かせれば、ほんのはした金を得るのにわざわざ危険と罪惡を同時に担ぎ込む必要はない。こういったものに首を突っ込む楽しさは、大抵の人間は

十代の頃に脱ぎ捨ててしまうのだが、平穩かつ陰鬱な学生時代を過ごしてきた湯山にとって、これは眩まぶしいくらいに新しい体験だった。
(悪いことをすれば、いずれ捕まる……)

捕まるのは悪事を続けるからだ、湯山は思い込んだ。なに、右も左もわからない老人から小遣いを貰うだけだと、湯山はかすかに芽生えた罪悪感を握りつぶした。

(俺は器が小さい……)

と、湯山が頭を抱えなくなるくらいに悩んだのは、老人をだまくらかして小金を得たことではなく、結局のところ罪悪感に耐えかねた自分が、盗んだ金を丸々老人に返してしまったことだ。無論直接ではなく、郵便受けにしのばせるという、いかにも小心丸出しの方法で。

「退屈でなけりゃあ、良いのさ」

自分を慰めても虚しさは止むどころではなく、さらには冷や汗をかくほどに怖気おしけづいているのは、彼が同じく悪事に手を染めた仲間を裏切ったからだ。湯山の知り合いの中でもずいぶんと性質の悪い男で、今回の失敗をだしにこれから付きまとわれるようになるかもしれない。

(逃げたい!)

と思ったのは一瞬で、すぐに腹が据わった。熟考して覚悟を決めたのではなく、思考を停止することで結論を早めたのだ。湯山にはこういう想像力の欠陥からくる樂觀癖がある。

第一章「原初の声」(2)

いつものようにボロ車を出して会社へと向かう途中だった。

案の定、例の悪友につけまわされた。

悪友にも彼なりの事情がある。こういった悪い話を手軽に持ち込んでくる輩は、往々にして他にも繋がりをもっており、湯山が失態を犯したせいで責任を追及される立場に陥った。湯山の人の良さにつけこんで、とりあえずは利用してみたが、彼も流石に人選を誤ったことを後悔した。

(脅すか……)

窮まれば湯山から金を^{むし}耄り取ればいい。あんな小心な男、少し脅かしてやれば、自分可愛さに誰でも騙す様になるだろう。出来なければ湯山の親をゆする。それだけの単純な作業だ。

「まずは挨拶代わりだ」

そういつて、悪友は湯山の乗る車を追い回した。この行為自体に大した意味はないが、湯山の恐怖心を煽り、「この男からは絶対に逃げられない」という強迫観念を植え付けるために必要な、一種の儀式である。

湯山がバックミラーから覗き込んだのは、そんなことを事も無げにやってのけようとしている悪友の姿だった。鼻筋と目が細く、長い顔である。嗤うと目元に怪しいしわが出来る男だ。

「木田、てめえ。嗤ってやがる！」

心のどこかで悪友のことを軽蔑してきたせいか、恐怖よりも先に怒りが立った。

会社までついてこられては叶わないと、信号が切り替わるとともにアクセルペダルを勢いよく踏んだ。早朝であることもあって、少し混み気味だが、下手に空いているよりは撒きやすい。湯山は強引に割り込みを繰り返して追尾する木田を振り切ろうとした。だが、相手もこういった手合いはお手の物だろう。吸い付いたように離れ

なかった。

しきりに携帯電話が鳴っているが、見ずともわかる。次第に双方ともなりふりかまわなくなった。あたりの目を^{はばか}憚らずに猛追と逃走を始めた。

流石の湯山も退屈を捨て去った自分を感じる暇はなかった。大抵、退屈を嘆く人間というのは本質的に平穏を愛しており、しかし時間の使い方という、人間の価値そのものとも言うべき点において、哀れなほどに無能あるいは無頓着な場合が多い。湯山もその一人だった。

携帯電話が鳴っている。

「あれ？」

違和感。

これ以上にならないほどに非日常にいるのだから今の湯山は違和感で埋め尽くされているといつてよい。それにすら慣れ始めた頃、湯山は眼前に最も訝しい現象を見つけた。

（こんな音、俺じゃないぞ……）

携帯電話がけたたましく鳴っている。それが木田からのものであることは間違いない。だが、その音とエンジン音に混ざって、脳を貫くような裂音が聞こえる。

（いや、やっぱり携帯が鳴ってる）

耳障りなアラーム音に混ざって、それは確かに聞こえる。木田のせいで携帯電話が壊れたと思った湯山だったが、つい気になって、手にとってしまった。

「朝っぱらから一体何なんだよ。てめえはよ！」

車内に湯山の怒号が響いた。

だが、繋がった先は木田ではなかった。

——…こそ

風鈴の音のような細かい音が静かに響いた。どうしようもないほどの目まぐるしさの中にいるのに、どういうわけか、湯山はそれを聞き取ってしまった。

「こそ？」

顔が熱を帯びてきた。自分の発した言葉がどこかでこだましているような感覚がする。

——…こそ……よ……そ

（女の声……いや、子供か？）

それも一人とも思えない。受話器の向こう側に数人の気配のようなものを、湯山は感じ取った。

すう——と、あたりが静かになったと思ったのは、湯山の神経が片手にとった携帯電話に集中していたからだ。だが、次の瞬間、湯山を覆っていた静けさが一気にはじけた。

——…よう……そ……こそ……うこそ……ようこそようこそようこそようこそようこそ…

「うわぁ！」

叫ぶと同時に、目の前が真っ白になり、暗くなった。

——どこだ。ここは？

などという、古典的な台詞を吐くようには、湯山は出来ていなかった。

「おおお？」

奇声なのか悲鳴なのか、どちらつかずの声をあげた湯山はみだりに車外に飛び出すような真似はしない。

何せあたり一面荒野である。所々、茫々ぼうぼうと草が茂っていて、他はやや乾いた黄土が見える。もちろん、道路らしきものはない。上を向けば、雲ひとつない、死んだように蒼い空が広がり、太陽の光だけが異様にまぶしい。

ほんの数秒前まで、都心を車で走っていた自分が、何故こんなところにいるのか。

（神隠しか、死んだかだな——）

後者だとすれば、あの世も随分と殺風景なところだ——と、湯山は鼻で嗤った。別に湯山は抜けているわけではない。もし傍に道連

れになった誰かがいたとしたら、その者に抱きついて絶叫しただろう。

たった一人である——ということが、湯山がパニックを起こさない唯一の理由だった。とはいえ、周囲に自分と同じように、この怪異に巻き込まれた人がいないかは、静かな雰囲気とは裏腹に顔面を蒼白にして確認した。この男が他人からよくわからないと言われる所以のひとつは、自分の表情を自覚していないことだろう。周囲を一望して誰もいないことを確認すると、小さく嗤ったのだ。

勿論、こけおどしだ。こうやって自分で自分を励まさなければ、どうにかしてしまいそうだ。

——木田を撒けた。

という事実によって得た安心も少しはあった。最悪の状況を考えれば、見も知らぬ土地にいきなり迷い込んで、しかも木田と二人きりという可能性もあった。この期に及んであんな顔を見ずに済むなら、ひとりの方が良い。

ふと、携帯電話を手にとって見てみた。あまり期待していなかったが、電波は届いていない。最後の着信は木田になっており、あの妙な女か子供のような声は何だったのかは想像すら出来ない。

少し、車を走らせてみたが、凹凸のひどい地面のせいか、すぐにエンストを起こした。無闇に燃料を消費するわけにはいかず、冷房を切ったために、燃えるように暑い。それでも湯山が車外に出なかったのは、ひとつは草陰にたむろする狼の群れを遠望したからだ。

「はは、洒落しゃれになってねえや……」

ようやく、と言うべきか、湯山は事態の深刻さを飲み込んだ。

全く未知の世界に放り出されたわけだが、せめて（木田以外の）人の姿を見つきたい。

しばらく走ると、日が暮れてきたので、湯山は車内で夜を過ごすことにした。勿論、周囲の景色は一面の荒野であることには変わらない。

それでも何か心細かったのか、地面から生えたような大岩の傍に

車を停めた。樹木の傍は虫に集^{たか}られそうに気がすすまなかった。

「隣、空いてますか？」

などと、大岩に向かって空元気に話しかける姿は、もはや哀れですらある。

昼食にとるはずだった安い菓子パンを口に放りこみながら、湯山は考える。この暑さではすぐに腐ってしまうから、明日の朝食に残すことは考えなかった。ただ、ペットボトルに半分ほど残った水は節約した。

（突然、地球の裏側に飛ばされたか、異世界ファンタジーか、あるいはタイムスリップといったところか。あ、あの世って線もまだあったな）

自分の置かれた境遇にあたりをつけようと始めた想像は、夜陰の中で碎かれた。

風音もしない夜の闇の中で、小さく煌^{きらめ}く光の群れを見たとき、湯山はなにやら怖^{おそ}気だちそうな自分を励ますように、いくつか浮かんだ言葉の中で、最も雅味のあるものを選んだ。

（蚩かな……）

湯山は、光の群れが移動しているらしい事になかなか気づかなかった。それらは徐々にこちらに近づいていた。それに気づいたとき、湯山が動転しかけたのは、余裕のある言動とは裏腹に、この男の精神がつけば破裂するほどに緊張していた証拠である。

——誰かいる……誰かいるよ。

耳元でささやくような声が聞こえた。いや、果たして声であったか。自分の耳が何かを捉えたという感覚はない。直接頭に響いてくる言語を超えた何かは、湯山がこれまで一度も体験したことのない不愉快な現象だった。

後部座席のシートを倒してくつろいでいた姿から、一瞬で起き上がると、慌ててキーを回し、エンジンをかけた。

旋回するまで、隣席を失礼していた大岩に二度ほど尻をぶつけた。湯山は百八十度回転すると、真っ直ぐに走った。

しばらく走らないうちに、段差に乗り上げた。ライトをつけているが、こうもただっ広い場所では十メートル先が見えたところで何の意味もない。

——ふふっ……慌てる。

——慌てるよ。

頭に直接響いてくる声らしきものは、どうやらその光から放たれていることを湯山は感じ取った。脳を撫でるような意思の切れ端が、陽光が分解されて七色に見えるように、いくつかの色を伴っているようにも思えたからだ。

(さっきの声だ……)

携帯電話から聞こえた常軌を逸した多数の声。いや、あれは声であつたか。今と同じように直接頭に響いてきたのではないか——と、そこまで思念をめぐらせた湯山だったが、ついに車を捨てて奔り出した。夜光でも照らしきれないだっ広い荒野に單身飛び出したのだから、これは逃走というよりは狂走であつた。

——あ、逃げた。

——逃げたわね。

光は迷うことなく湯山を追尾してきた。

湯山は脇目もふらずに奔った。だが、ここは彼の歩きなれた、神経質なほどに平らに舗装された道路ではない。地が平坦であるというのは人界だけの話であり、荒野の地面はジャガイモのようにぼこぼこでとても人が歩けるようにはできていなかった。何故、広大な世界に人はわざわざ道という線を引くのだろうと、幼い頃疑問に思ったことがあつたが、文明に浸かりきった人類は自分が平らにした道しか歩けないという事実をここで痛感した。自分がいかに文明を享受した人間であつたか。

凹凸に足を突っ込んで転ぶよりも先に、湯山の足腰が悲鳴を上げた。一步踏み進むごとに足首が碎ける錯覚をおぼえるほど、ここは文字通りの荒野であつた。

ついに、しゃがみ込んだ。いや、がむしゃらに走ったせいで、立

ち止まった瞬間に腰から崩れた。呼吸が乱れ、どれほど空気を吸い込んでも足りなかった。

――座った。疲れたんだよ。

――これで終わりかな、遅い人。

――選んで。ねえ、選んで。

光の群れが湯山を囲んだ。

羽虫のようにあたりを不規則に旋回し始めたそれらを見て、湯山は不機嫌に乾いた息を吐いた。

「うるせえ。うるせえよ……」

第一章「原初の声」(3)

湯山は過呼吸で意識が飛びそうになる中、辛うじて周囲を確認した。

黒い画板に白い絵の具を撒き散らしたように不自然な光が周囲を漂っている。それもひとつやふたつではない。

――妖精。

という言葉が、湯山の頭に浮かんた。あるいは幽霊や得体のしれない生き物であるかもしれないが、怪談話が苦手な性格もあってか、よくわからないのなら妖精でもいいだろうとも思った。

妖精なら――と、安心できたならば、湯山の精神はよほど大雑把に出来ているといえたが、たえ呼称を知っていたとしても、現実にはいないはずのそれが突然目の前に現れた事実は、一個の人間を混乱と恐怖の淵^{ふち}に突き落とすには十分だった。

あるはずの物が無い――あるいは無いはずの物がある時、人は多くの場合、恐怖を覚える。事の大小はあれ、自分の信じる世界の物理法則が砕け散ったような錯覚がするからだ。

湯山が辛うじて意識を保っているのは、彼がこのショックに経験があるからだ。ほんの数時間前に自分が体験した奇怪な出来事に比べたら、妖精の存在など取るには足りなかった。

現状、湯山にとっての一大事は、この妖精^{ようせい}達が、自分を害するようなことがあるかどうかだ。

湯山が宙を漂う光のひとつを睨^ねめつけて観察していると、周囲から小さな声が上がった。

――選ばれた。選ばれたよ。

――目が合ったね。

――はやいね。はやいね。

全て子供のような無邪気な声であったが、闇の中でのそれはいかにも怪しかった。

湯山が見ていた光が、小さく揺らめいた。すると、蠟燭ろうそくの灯を吹くように、その周囲の光たちが一斉にかき消えた。

——ようこそ。

この台詞には聞き覚えがあった。とはいえ、最初に聞いたときは半分パニックに陥ったから良い印象は無い。

「妖精か何かか？」

周囲の光が掻き消えたことは、湯山が精神を安定させるにおいて十分に役に立った。

すう——と、光が近寄ってきたので、湯山は思わず振り払ってしまった。光に触れたという実感は無かったが、振り払った手が怖気だった。

——ユマ……

自分の姓を呼ばれた——と感じた時、湯山はこの超常の何かに抗うことへの意味を疑い始めた。

「何で俺の名字を知っている」

湯山の問いには、光は答えなかった。ただ、壊れた機械のように同じ事をつぶやき始めた。つぶやくといっても、湯山の頭の中に直に声に似た何かが響くだけだが。

ふと、湯山はこの光には自我がないのかと思った。あるのは何かの本能だけで、これはそれを行っているだけなのではないか。先に光同士で会話をしていたように感じたのは、湯山がそう思っていただけで、各々が別に湯山の頭に語りかけてきたのかもしれない。

これは、現象なのだ——と、湯山は思うようにした。日が昇れば野一面を朝日が照らすように、この世界では生物という存在以前の何かなのだと思った。

それと符合するわけではないが、湯山は蜻蛉とんぼを誘うようにして右手を差し出した。どういうわけか知らないが、そうすべきだと思った。

湯山に振り払われて迷うように宙を漂っていた光が、指の先に止まった。

——荊いばらを……

湯山が脳内でそう訳すしかない何かをつぶやくと、光は死んだ蜚のように消えた。

自分はこの世界における普遍的な何かを今、受け取ったのだと思つた。誰に聞かれても説明できる自信はないが。

明くる日の朝、湯山はあてどなく車を走らせた。

幸い、給油直後であるためにしばらくは走れる。だが、起伏の激しい悪路は車自体よりも湯山本人に対する負担が大きく、地形の突起の見づらい草原部を迂回し、禿はげた地面の続く荒野を走った。それでも一時間に一回は気分が悪くなり、停車しては車の外でうずくまって吐いた。三回目は吐き出すものは何もなくなっていた。

水が足りない。

小川は見つけた。だが、無用心に川の水を飲むわけにはいかない。（それはいざという時だ。俺みたいに頑丈でない人間だと一発でアウトだ）

時々、貧相な木に実がなっているのを見かけたが、それが食用に耐えられるかどうかは分からない。

（つくづく、食い物が向こうからやってくる暮らしをしてきたんだな……）

対価さえ払えばすぐさま食事にありつける世界が、実は途方もないものであったのではないかと、湯山は思うようになった。

「とにかく、人だ」

人間を見つけないければ話にならない。湯山はこの世界で生きる術を知らないのだから。まずは模範というべきこの地の住人を捜すことが、彼の第一の目標だった。それ以上に、自分という存在を保護してくれる何かを探していた。そもそもこの地に人がいるのかどうかという疑問は捨てた。必ずいる。そう思わなければ正気を保てそうにない。

半日も走らないうちに、車の方が先に音をあげた。燃料が尽きた

のではなく、車体が歪むような悪路を走り続けたことによる。

「お上品な道しか走ってこなかったもんな。中古ワゴンだとこんなものか……」

皮肉めいた台詞を吐いても、虚しいだけだった。自分を外界から守ってくれる強力な夜具も兼ねていたから、これから徒歩で行くことを考えると、途方に暮れた。

（人じゃなくて、食い物を捜すべきだった）

川辺で魚釣りでもして、急場をしのぐくらいの事すら考えつかなかった。第一、食用でないものを体が受け付けないだろうということは、湯山にとっての大前提であった。とはいえ、そこいらに見知った果実がなっていたり、調理された肉が落ちていたりするわけではない。

このような危機時であるのに、そういった甘えの中にあるということとは、湯山でなくとも自覚しづらい。

まずは野垂れ死にを回避する方法として、日が暮れるまでにやるべきことを決めた。

（火を焚^たこう）

どうにもやめられない煙草の習慣というものが疎ましくなったこともあったが、今ばかりは感謝した。ライターさえ持っていなければ、火打石以前の旧態で火を熾^{おこ}す羽目になっていたかもしれない。

既に茫々たる荒野は抜け、遠くに山霞が見える。近くに小川もあり、所々木々が茂っていた。

枯れた枝葉をたんまりと拾ってきて、湯山は小さな焚き火を熾すと、寒くもないのにそれに手を当てながらしばし考えた。

（人間は何故、山から下りたんだろう……）

短時間であれ平野をさまよった感想といえば、途方もなく広い場所には食料もなく、水もなく、それに比べれば山など貯蔵庫のごとく禽獣^{きんじゅう}がいて、木の実や水もあるだろう。それを捨ててまで、人は何を求めて平野へ下りたのだろう。

（きっと増えすぎたんだ）

あるとき、山という空間では増えすぎた人種を賄えなくなつたのかもしれない。人は自ら進んで平野に下りたのではなく、追い出されたということになる。湯山のこの想像は無論、何かの書物に立脚したものではなく、彼の勝手な想像である。

煙草に火をつけた時、湯山は車に鍋でも積んでおけばよかったと思った。軽装でないと歩けないと思って、気が付いたものしか持つてこなかったから、食事の役に立つものといえは空のペットボトルだけだ。これでは湯を沸かすことも出来ない。

（いっそ、解体して鍋でも作りゃよかったんだ……）

本気でそう思った。今でも生の水を飲むことは怖い。

流石に空腹には勝てず、河で魚を獲ることにした。水を怖がったユマであるから普通に考えれば魚を敬遠しそうなものだが、ここは意を決したと言ふべきだろう。知識がない以上、木の実は危ない。

ちようどいい小川を見つけて、枝と石で堤を作った。子一時間ほど待つと、小魚が堤に入ってきたのでそれを焼いて食った。水藻の臭いがひどく、味も何もなかったが、腹だけは膨れた。

（便所も作らんな）

木の棒を拾ってきて地面を掘った。出来るだけ深く掘りたかったが、土が固く、途中で諦めた。

そうこうしているうちに日が暮れた。次第に寒気が下りてきて、湯山は車に積んであった毛布に包まったが、ここにきて車を捨ててきたことを後悔した。

（火を絶やさないとだ……）

野天の下で熟睡できるはずもないから、目が醒める度に焚き火に枯れ枝を足した。

（雨が降ったらどうする）

なども考えたが、それ以上に押しつぶされそうな疲労感に襲われて、ついには気絶するようにして寝入った。

第一章「原初の声」(4)

「おい」

疲れていたためか体がだるく、湯山は最初、その声に反応できなかった。

「おい、起きろ。風邪をひくぞ」

と、言われて起きたのは、額に何か冷たいものがあたったからであつた。

(雨だ……)

ずぶ濡れになって見る見る衰弱してゆく自分を想像した湯山は、跳ね起きた。

「わっ!」

何かに激突した。

額を押さえて目の前を見ると、自分と同じように額をさすつている男がいる。

(人だ……)

あれほど探し回った人間に出会ったというのに、湯山は安心しなかった。というよりも、警戒した。男の身なりが、多少は湯山も想像していたが、自分の衣服とかけ離れていたことと、どうやら一人ではないらしいことに気づいたからだ。

男は、湯山が中国の時代劇で見たような黒い衣をまとっていた。

縁が最も黒く、他はやや色が浅い。髪は後ろに長く纏めていて、スーツ姿に短髪である自分が周囲から完全に浮いていた。

既に火が消えた焚き火を囲んで数人がいた。皆、湯山と額を激突した男と同じ身なりだった。

湯山が目ざとく見つけたのは、彼らの主か何かが乗っているらしい馬車だった。湯山はこの光景だけで、この世界の人間が、主と従を厳しく区分する何かから抜け切れていない蒙くらさを持っているような気がした。この予想が彼を最も警戒させ、しかも後に当たること

になる。

「そこな、旅の人」

馬車の窓にたれたカーテンの中から女の声が聞こえた。その声とともに黒衣の男たちが一斉に跪いた。ひざまず

湯山は奇妙な体験をしている自分に気づいた。

先の男にしろ、車上の女にしろ、喋っている言葉は湯山にとって全く耳慣れないものであるのに、頭の中ではそれが理解できるのだ。――ようこそ。

妖精のような何かと触れ合っていた時のように、頭に直接意思を穿つ様な何か。それが全く知らない言語を、湯山が理解することを可能にしている。

(はじめ原初に言葉ありき……か)

何かで読んだ一説を思い出すと、湯山は妖精から受け取ったものが何であつたかにあたりをつけた。

男の一人が馬車の扉を開けると、中から一人の少女が現れた。

(あか紅い……)

髪がやや紅い。少し小柄で、少女のようだが、思わず口元が緩んでしまうような愛らしい顔をしている。目が大きく、可愛げを損なわない程度にそばかすがあり、鼻はこじんまりとしている。衣服は無骨な男たちが蠅はえに見えるくらいに整っていて、青をベースにした幾重かの衣を着重ねている。

「見慣れぬ衣服を着ておられるが、どちらのご出身でしょうか？」

湯山は一人では生きていけない自分を痛感している。寝ている間に雨に打たれていれば、三日もたたずに肺炎を起こし、それをこじらせて死んでいたかもしれない。

ひとまずは行儀のよさそうなこの女に身を寄せることを考えるしかない。どこかの集落に紛れ込んだとして、一から生計を立ててゆく自信など湯山にはない。それよりも、このお嬢様じみた娘に寄生することで急場をしのげれば十分とすべきだろう。

(そのためには、なめられない事だ)

最初から、湯山はそういう目で少女を見ていた。少女にすれば単なる好奇心でこの見慣れぬ男に尋ねたのだが、湯山の方は人知れず必死だった。

「俺にとつては貴方の衣服の方がよほど見慣れない。どちらのご出身か、訊^きいてもよろしいか？」

ぞんざいな口調で湯山が言うと、少女は驚いたようだ。彼女が小さく頷くを見て、湯山は自分に宿った神秘的な何かが、内から外に向けても作用するものであると確信した。

（言葉が通じた……）

一安心した湯山だったが、周囲の男たちの顔が一瞬だけ強張ったのを見たとき、わずかに後悔した。素直に状況を説明し、助けを請うべきであったのかと。

少女が、小さく笑った。

「これは失礼。わたくしはローファン伯の長女アカアです。この服は我がオロ王国の婦人であれば、誰でもたしなむ程度のもんです」暗に、この程度のことも知らない貴方は誰なのだ——と言われている気がした。だがそこに悪意が感じられないのは、この娘は本当にそれを疑問としているのかもしれないと、湯山は思った。

（正直に言うか。信じられるようには工夫するとして……）

相手にあまりにも毒気がないので、湯山のほうが馬鹿らしくなってしまった。

伯爵の娘と聞いて多少は気圧された湯山だったが、顔には出さないように努めた。本来ならば表情に出してしまうところだったが、何分顔色が悪く、今の湯山は何を話しても不機嫌そうに映る。

「俺の名は湯山翔。どうやら見も知らぬ土地に放り出されたようだ。乗り物に乗っていたんだが、途中で壊れたので今こうして人里をさがして歩いている」

こういうことを話するとき、湯山はなぜか知らない他人のことを話すように淡泊になる。このせいで聞き手に事の逼迫^{ひっぱく}が伝わらずに損をしたことが何度かあるが、本人はその原因が自分にあることにす

ら気づいていない。

だが、今ばかりはこれが幸いした。少女アカアの関心をひいたのだ。

それに、湯山が思わずやってしまった動作が契機となった。

突然、耳をつく高音がユマの懷で鳴った。彼はおもむろにポケットから携帯電話を取り出すと、前日に目覚まし代わりに設定していたことを思い出しながら、音を消した。

「ああ、気にしないで。ただの目覚ましだから」

湯山翔という人物を強烈な印象とともに相手に焼き付ける効果が一本人ははからずとも——この行為にはあった。

他にも、ユマが煙草を吸う際に使うライターなどは、大いにアカアの好奇心を刺激した。

「ユマカケル殿は術士であられたか……」

そこからは飛ぶように事態が好転した。車上に誘われたのである。湯山が術士とかいうもの——大体想像は付くが——に間違われた上、その後の問答に決定打があった。

「湯山が氏で、翔が名だ」

氏名で呼ばれると、どこか冷たい感じがして嫌な気分になったために、湯山が意味もなくそういったのだが、どうやら氏を持つというのは特別な意味があるらしく、先の携帯の件も合わさって、ユマという男が妙な存在感を持つようになった。

湯山はアカアと臨席した。

お嬢様の気まぐれで道連れになるということが、何を意味するのか、湯山はこの時大した予想を立てなかった。

香を焚いてあるのか、馬車の中の香氣にむせ返りそうになった。

「ユマ先生、ユマ先生」

道中、アカアは湯山のことをこう呼ぶ。もうこれ以降は湯山という漢字は必要ないだろうから、彼のことを単にユマと呼ぶことにする。

車上の旅が快適とはいいがたいが、ユマのように歩きなれない人間にとっては天からの恵みに匹敵した。

「このあたりのことが知りたい」

そう言いながら、ユマはアカアにこの世界のことをさりげなく尋ねた。彼女と接してみても気づいたことだが、ユマはアカアが持つ本に書かれた文字を読むことが出来なかった。

「なるほど、言葉ありきだ」

妙なところで感心してしまったが、とにかく、彼女の言ったことで重要そうなものをメモ帳に書き留めた。アカアにはユマの持つものや仕草の全てが新鮮らしく、目を爛々^{らんらん}と輝かせていた。

アカアの馬車に乗るのは一日のうち、ほんの二、三時間ほどで、他はアカアの乗る馬車の後に続く荷馬車の一角をあてがわれた。換え用の馬に乗ればどうかとも言われたが、振り落とされるのが目に見えているので断った。時々、黒服の男たちにまぎれて歩いたりしたが、彼らはユマのことを快く思っていないらしく、ろくに会話もせずに荷馬車に戻った。

「どこへ行くんだ？」

ユマが聞くと、アカアは周囲の景色を確かめるように幌をめくってから言った。

「王都ですわ。実家に帰るんですの」

「君の父はローファンとかいう土地の主じゃあなかったのか？」

「確かにローファンに封じられましたが、王宮勤めであるために王都に居をかまえていらっしやいます」

ユマは、アカアの父が彼女に似ていることを心底願った。得体の知れない術士が、実はただの難民——というべきだろう——であることがあればどうなるか。

（とにかく、食いつなぐことだ……）

そう思いながら、夜天の星を数えた。知っている星座はひとつもなかったが、やや欠けた月だけが、故郷のそれを生き映したように浮かんでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5984z/>

貴く翔べ

2011年12月19日23時49分発行